

北京師範大学珠海分校日本語専攻における卒業論文のテーマ分析

Analysis of Thesis Title at Japanese major of Beijing Normal University at Zhuhai

佐藤 航¹

SATO Wataru²

要旨

本稿は中国・広東省にある北京師範大学珠海分校の日本語専攻でこれまでに書か提出された卒業論文のテーマ選択について研究したものである。日本語専攻のカリキュラムや授業内容、研究に使用した資料の種類などからテーマ選択の背景を探った。その結果、言語学の分野のテーマを選択した卒業論文は、その約半数が社会言語学のテーマであったこと、また、ドラマや歌詞など、学生たちが普段から身近に接しているコンテンツを一次資料として用いたものが多いことが明らかになった。

キーワード：卒業論文、アカデミックライティング、カリキュラム、中国、日本語専攻

Abstract

This paper is a study of the topic selection of graduation theses written so far in the Japanese language major of Beijing Normal University at Zhuhai, in Guangdong Province, China. The reasons for the choice of theme were explored based on the curriculum and course content of the Japanese language major and the materials used in the research. The results revealed that about half of the graduation theses that chose a theme in the field of linguistics were on sociolinguistic themes. And it was also clear that many of the studies used content that students were always familiar with, such as TV drama and lyrics, as primary sources.

Keywords: graduation theses, academic writing, curriculum, China, Japanese major

1. はじめに

国際交流基金の調査によると、日本以外の国で日本語学習者の人数が一番多いのは中国である（国際交流基金，2017）。なかでも、中学高校や民間の日本語学校より、大学など高等教育機関で日本語を学ぶ学習者の数が多いのが中国の特徴である。中国の大学における日本語専攻では、卒業論文の執筆が卒業の要件になっている。しかも、その卒業論文はふつう日本語で書かなければならない。同調査によると、中国の高等教育機関で日本語を学ぶ学習者の数は 625,728 人とある。（国際交流基金，同上）すべての大学

¹ 北京師範大学珠海分校外国語学部日本語専攻, School of Foreign Languages, Beijing Normal University at Zhuhai

² อาจารย์ภาควิชาภาษาไทยและภาษาตะวันออก คณะมนุษยศาสตร์ มหาวิทยาลัยรามคำแหง E-mail : h-zuoteng@hotmail.com

* Manuscript received January 26, 2021; revised March 28, 2021 and accepted April 26, 2021

で、卒業論文が卒業要件になっているとは限らないので、はっきりしたデータはないが、毎年推計 1 万本以上の日本語の卒業論文が書かれていると思われる。

卒業論文は大学 4 年間の学習の集大成である。それに、論理的な構成や、資料に対する批判的な態度など、たとえ卒業してから一般企業に就職したとしても、学生個人の成長にとって必要なことを多く学ぶことができる。しかし、中国の大学教育においては、ゼミの授業が設置されていることはまずなく、卒業論文執筆のための教育的な支援体制が整っているとはいえない。

筆者は、広東省にある北京師範大学珠海分校（以下、大学の英語名 Beijing Normal University at Zhuhai を BNUZ と略す）外国語学部の日本語専攻で 7 年にわたって卒業論文の指導を経験してきた。BNUZ は「北京師範大学」という名前がついているが、広東省に所在する。組織としても北京にある北京師範大学とは別組織で、同じ名前を冠しただけの純粋な分校である。

筆者を含む BNUZ 日本語専攻では、卒業論文の執筆がカリキュラム上あまり重視されていない中国で、なるべく学生に批判的・論理的思考を身につけてもらおうと、カリキュラムの改定などをふくめ、さまざまな卒業論文指導のための改善に取り組んできたつもりである。本稿では、いわゆるアカデミック・ライティング（以下、AW）のための漸進的な教育を目指した、BNUZ 日本語専攻の卒業論文作成に向けた教育支援の改善についても言及したいと思う。

日本のアニメやゲームが好きで日本語専攻を選んだ、という話は学生からよく聞くが、卒業論文執筆の際は自分の興味ある分野の中で、さらに詳しいテーマを選ばなければならない。その卒業論文のテーマについて観察することによって、より詳しく中国の学生の日本や日本語に対する興味の対象、さらにいえば中国人が日本の何に注目しているのかが見えてくるはずである。

2. 研究の背景 —BNUZ と日本語専攻と日本語専攻における AW 教育について—

筆者が所属する BNUZ は 2002 年に設置、外国語学部日本語専攻は 2010 年に設置された。日本語専攻の学生数は毎学年およそ 80 人で、2 クラスに分かれている。2 つのクラスはそれぞれ、日英バイリンガルコースと、日本語ビジネスコースだが、卒業論文の執筆は特にこのコースの名前にこだわらず、日本語、日本文化、日本社会、日本文学に関するテーマであれば認められることになっている。

1 期目の学生の卒業論文の指導については、2013 年から始まった。卒業論文の指導が始まった当初、日本語専攻の教員は計 6 人で、卒業論文指導の経験者は誰もいなかった。しかも、カリキュラムについていえば、当初の日本語専攻のカリキュラムはほぼ英語科のカリキュラムを丸写しにしたもので、AW に関する授業やゼミがないばかりか、カリキュラム編成の上で卒業論文執筆を最終的なゴールとするというかんがえもなかった。

カリキュラムの不備と教員の経験の浅さによって、卒業論文の指導がはじまった最初の頃は、その質も高くなく、いまいちど見返してみると、本来日本語専攻の卒業論文として認められないようなテーマや、学生の能力や資料の入手可能性を考慮すると執筆が困難とかんがえられるようなテーマの卒業論文もあった。また、卒業論文の構成や論理的・科学的な表現のしかたにも多くの問題があった。

しかし、ここ数年では教師のアドバイスを得ながらも自力で研究計画書を書き、卒業後に日本に留学する卒業生も増えるなど、BNUZ の日本語専攻における AW 教育は一定の成果があったと考えている。

3. 先行研究

学部における卒業論文の指導、AW、アカデミック・ジャパニーズをテーマとした論文にはいくつかの種類がある。1 つは AW 指導の教育実践報告の類である。2 つめはアンケート調査やインタビューなどを通じて、または大学で AW 指導に携わった教師がみずからの教育経験に基づいて AW 教育の現状を分析した事例研究の類である。またさらに、これは特に社会科学系の卒業論文に関する研究に多いのだが、卒業論文に関して特にそのテーマの語彙分析などを行い、テーマ選択の傾向を分析し、学生の興味の対象について研究したものである。

まず、1 つ目の教育実践報告の研究であるが、とくに中国の日本語専攻における指導を扱ったものとして、楊秀娥（2016）がある。これはこの論文の筆者が中国広東省の中山大学で実践した卒業論文作成支援活動の報告である。少人数で行われた支援活動の中で、学生が互いにアドバイスを与え合いながら、どのように卒業論文執筆の意義を見出したか、という過程を記述的な研究によって明らかにしている。この指導の中では、学生に指導の中での気づきや反省点を書かせた「振り返りシート」が用いられたが、研究ではその「振り返りシート」と学生へのインタビューを主な資料としていた。そこから、その学生の AW について学び、卒業論文執筆の意義を見出していった過程について書かれている。

2 つ目の事例研究の論文であるが、これは特に中国での研究に多く、検索してみると中国の日本語専攻における AW 関連の論文の多くが、この類であった。例えば、童心（2016）や王妍（2015）があるが、その他にも各自の所属する高等教育機関での卒業論文指導の現状について書かれたものは多い。多くの論文でテーマの選定に関する問題点や、剽窃の多さなどが指摘されている。また大島ら（2016）は、中国の教員に対してインタビューやアンケート調査を行い、教師にとっての指導上の困難やその原因について明らかにした。それによると、調査対象となった教師全員が「困難点としては、テーマ選び、興味の引き出し、希望分野への対応とすり合わせ、個人差への対応の困難」を指摘したという。

また、これは日本の大学の日本人学生が書いた卒業論文についての研究だが、実際の卒業論文を資料とした個別的研究に和多（2005）がある。この研究では実際に提出された卒業論文を引用しながら、事実にかかわる記述をしていながら論拠が示されていないことや、主観的な表現が使われていることなど、論文における様々なルール違反を指摘している。そして、最後にこれらの卒業論文における問題が表れた原因として、「主観的なことと客観的なことの混同」、「批判力の欠如」など5つの点をあげている。

最後に、ワードクラウドを用い、卒業論文テーマのタイトルに使われた語彙を分析した研究として、奥平ら（2016）がある。この研究ではワードクラウドによって、単語の出現頻度や単語間のネットワーク分析を行い、学生の興味の対象、そして年度ごとの縦断的な変化についても調べ、傾向を分析している。その結果、平成25年度に「原発」「被害」「福島」「災害」などの単語が卒業論文テーマ中に多く見られたこと、平成16年度には「食品」という単語が多く見られたことを指摘している。また、その原因として、東日本大震災や食品偽造事件の発生をあげている。

4. 研究の目的

これまでの先行研究では日本での特に社会科学系の卒業論文に関して、テーマの傾向を分析したものはあった。しかし、中国など外国の学生が日本語で書いた卒業論文に関して、そのテーマの傾向を分析したものは管見では見つからなかった。しかし、外国の学生がどのようなテーマを卒業論文のテーマとして選択するかということは、学生の興味の対象を知り、今後の日本語教育がどのように発展していくのか、ということを知るうえでも有用ではないだろうか。日本のアニメやゲームが外国でも人気を博していることはよく知られているし、そういったソフトな文化・サブカルチャーから日本語の学習を始めようとする学生は多い。しかし、誰もがそうではないし、アニメやゲームに関する卒業論文を書く学生も決して多くはない。学問としてそのようなサブカルチャーを扱うことは可能だが、先行研究も少なく、研究として行うのは簡単ではない。多くの学生は自分の興味、関心に合わせ、さらに先行研究や一次資料の入手可能性も考慮しながら現実的なテーマを選択している。

しかし、そのように現実的で実行可能な研究テーマを選択できるようになるには、そのための準備となる教育支援が不可欠である。もし、必要な支援が提供できていなかったとすれば、研究の実行可能性や意義とは無関係に、ただ単に学生の興味にまかせて卒業論文のテーマが決められてしまい、最終的に行き詰まってしまい完成度の低い卒業論文になってしまう可能性もある。そうならないためには、教師による、学生の研究計画に対する適切な助言と方向修正が必要である。BNUZの日本語専攻ではそのような教育支援が行えるよう、大学4年間の教育の最終的なゴールを卒業論文執筆と位置づけ、そこに向かって漸進的にライティング能力を高めてゆけるよう、カリキュラムの編成・改

善を行ってきた。

そこで、本稿ではまず BNUZ 日本語専攻のカリキュラム、特に卒業論文執筆に向けた授業を中心に概観し、その内容についても紹介したい。

そして、そこで学んだ知識をもとに学生はどのようなテーマを卒業論文のテーマとして選んできたのかを分析してゆく。そこから、BNUZ 日本語専攻のカリキュラムがどのように学生のテーマ選定に影響しているのか、またこの数年 BNUZ 日本語専攻の学生が日本や日本語のどのような事象に関心を抱き、卒業論文テーマとしてきたのか明らかにしたいと思う。

5. 資料について

BNUZ 日本語専攻では常時 5~6 人の講師が在籍しており、それぞれで分担して学生の卒業論文指導を行ってきた。うち 2 名の講師は主に文学の指導を担当、1 名は言語学を主に担当、筆者を含めた 2 名は特に研究分野を定めることなく、指導の学生を受け入れていた。日本語専攻全体で見ると、卒業論文のテーマとして文学を選ぶ学生がもっとも多く、毎年 3 分の 1 近くを占めていた。

このうち本稿では、これまで筆者が指導を担当した、2014 年から 2019 年までの既提出卒業論文計 7 年ぶんのタイトルと副題を一次資料とする。毎年十数人の学生を指導していたので、ぜんぶで 79 本の卒業論文が保存してある。文学に関する卒業論文は、他の講師が主に担当していたことから、筆者は文学を扱った卒業論文については 2 例を除き指導を担当したことがない。これまでに担当してきた卒業論文は、言語学（文法、類似表現の分析、日中対照分析、社会言語学、認知言語学など）の分野か、日本文化、日本社会、日本語教育に関わる分野のものが主であった。日本文化・社会・教育に関する研究テーマはその年によって最新の話題が取り扱われることもあるため、その年ごとの学生の興味の変化をより探ることができると考えたからである。

本稿では上述のように 77 本の卒業論文テーマを分析の対象とするが、このうち大きく分けて言語のテーマに分類されるものは 37 本、日本文化・社会・教育に分類されるものは 40 本であった。

6. BNUZ 日本語専攻のカリキュラムについて

大島ら（2016）などでも主張されているように、AW には漸進的な指導が不可欠である。AW の漸進的指導とは「卒業論文指導の段階のみならず、すべての科目の中で、少しずつ卒業論文作成に必要な知識を教えて技能を磨いていく [大島ら（2016）p.34]」という指導のあり方である。卒業論文作成のために必要な知識は語彙や文法だけでなく、資料に対する批判的な態度や、客観的な記述など習得すべき知識は多岐にわたり、また

膨大である。AW の漸進的指導とは、それらを 4 年間かけて少しずつ教えてゆく、という考え方と言いかえてもいいだろう。BNUZ 日本語専攻でもこのような漸進的な AW 教育を目指してカリキュラムの編成と改善を行ってきた。

ここではその BNUZ 日本語専攻のカリキュラムについて概観する。まず、BNUZ 日本語専攻では日英バイリンガルコースと、日本語ビジネスコースが設けられており、2 年次に進級する際にどちらかのコースを選択する。日英バイリンガルコースでは英語の授業が 4 年間で合計 10 単位（5 科目）あり、日本語ビジネスコースでは「ビジネス翻訳」「ビジネスライティング」などビジネス日本語の授業が同じく合計 10 単位（5 科目）設けられている。

しかし、卒業論文は上記 2 つのコースに関係なくテーマを選ぶことができるようになっている。以下に述べるライティングに関する授業も上記 2 つのコースに関係なく、日本語専攻全体の必修科目となっている授業である。BNUZ 日本語専攻ではライティングの基礎科目として 2 年次の 1 年間 2 学期にわたってそれぞれ「日本語作文（一）」「日本語作文（二）」の授業が設けられているほか、3 年次後期には卒業論文作成を念頭に置いた「高級日本語作文」が設けられている。2 年次の「日本語作文」の科目は、BNUZ 日本語専攻の学生にとってはじめての作文の授業となる。授業では毎週学生全員に宿題として作文を書かせ、その中に現れた誤用や不自然な日本語について授業で分析したり、既習の文法事項で特に中国人学生にとって習得が難しいものや類似表現の使い分けを比較したりなど、語彙や文法を中心とした講義を行っていた。いっぽう「高級日本語作文」では、3 年生最後の授業ということもあり、4 年次での卒業論文執筆のための準備となるような授業としていた。具体的には論文の中で使われる表現形式や、引用、参考文献リストの書き方などを学び、演習も行うという形式である。

BNUZ では 1 学期は 17 週間で、18,19 週目はテスト期間とされていた。しかし、4 年生はインターンに行かなければならないため、授業は 1 学期目の半分である 9 週で終了する。そのため、本来 17 回行われるはずの授業は 4 年生だけ週 2 回×9 週のペースで行われる。この 4 年生向けの AW の授業として設けられていた選択科目が「日本文化研究」である。授業の名前は「日本文化研究」であるが、日本文化に関する卒業論文を書きたい人に限らず、誰でも受講を認めていた。この授業の内容は、3 年次の授業からは一歩進んで、学生自身の卒業論文のテーマを選定することを目標としていた。そこで、この授業ではテーマ選定の方法、選んではいけないテーマ、研究の実行可能性、資料の探し方、剽窃についてなどの講義の他に、毎日数人に研究計画を発表させていた。発表の後には、受講者に意見を求め、また研究計画の問題点も指摘させるようにしていた。AW の授業としては、これが最後の授業となる。

以上が 2 年次から 4 年次までの AW に関する授業の概要である。この他 BNUZ 日本語専攻では、学生の興味と知識を深めるため、「日本語を学ぶ」授業の他に、「日本語で学ぶ」授業として、言語、文学、日本文化・社会という 3 つの専門領域ごとに 2 年生

後期からの専門科目を設けていた。具体的には2年次後期の必修科目に「日本近代文学史」、3年次前期の必修科目に「日本語言語学」「日本古代文学史」、3年次後期の必修科目に「日本文学作品鑑賞」、選択科目に「日本言語研究」「日本社会」、4年次の選択科目に「日本文学講読」である。上述の専門領域というのは大まかな授業の分類で、履修の際に学生がこの専門領域に拘束されることはないのだが、選択科目に関しては学生自身の興味・関心と卒業論文のテーマに合わせて高年次の授業が選択できるよう配慮した。

科目名	必修科目 or 選択科目	履修年次
日本近代文学史	必修	2年次後期
日本語言語学	必修	3年次前期
日本古代文学史	必修	3年次前期
日本文学作品鑑賞	必修	3年次後期
日本社会	必修	3年次後期
日本言語研究	選択	3年次後期
日本文学講読	選択	4年次前期

表1 BNUZ 日本語専攻における3つの専門領域の授業

以上のように、どの学生でも言語、文学、日本文化・社会いずれかの領域の授業を履修し、卒業論文の準備をできるようにカリキュラムを設定した。では、卒業論文のテーマを選ぶ際、この大まかに分けたこの3つの領域のうち、学生の選択した卒業論文テーマはどのように分布していたのかというと、文学をテーマに卒業論文を書こうとする学生が全体の半分弱だった。常時5-6人いる講師の中で2人が文学の指導を担当しており、2人の講師の担当する学生の卒業論文は全員が文学、テーマを特に絞らない他の講師の指導する学生の中にも毎年数人ずつ文学のテーマを選ぶ学生がいた。これは、上記3つの専門領域に分かれた授業のうち半分が文学・文学史の授業であることとも関連しているかもしれない。やや文学偏重のきらいがあり、カリキュラム編成の際に、文学の授業を少し減らすことを考えたこともあるが、BNUZ 日本語専攻の学位が「日本語・日本文学」となっていることから、文学の単位削減は学部から認められなかった。これは、中国の大学における日本語教育が文学重視の教育思想を長らく保持してきた(田中2013)ことも関係しているのではないと思われる。

文学の卒業論文テーマに関する分析は別稿に譲るとして、次の項からは実際に筆者が指導を主に担当した、言語、日本文化・社会・教育の卒業論文テーマに関する分析を始めてゆきたいと思う。

7. 本稿で利用するテキストマイニングツールについて

本研究では、文学を扱った2例の論文を除いた、言語学と日本文化・社会・教育の2つに大まかに分類したうえで、この2つの領域の卒業論文テーマにどのようなテーマが選ばれてきたのか、視覚的にわかりやすく示すため、それぞれの分野に現れた単語をテキストマイニングツールで分析する。テキストマイニングツールとは、文章の中からそこに含まれる単語を自動的に抽出し、単語の出現頻度などを分析できる機能のことである。そのことによって、学生の卒業論文タイトルの中で使用頻度が高かった単語が大きな字で表示されるなどして、おおまかに可視化される。そのうえで、それらの単語が、どのようなタイトルの中に現れたのか、実際のタイトルについても引用しながら、そのタイトルが選定された背景を探りたい。

テキストマイニングツールについては、Web上にて無料で公開されている、株式会社ユーザーローカルのUser Local テキストマイニングツールを利用する。Webサイト上のフォームに解析したいテキストを入力すると、自動的にワードクラウド、共起ネットワークなどが生成されるようになっており、論文などへの引用も可能となっている。今回は、ここにこれまでの卒業論文タイトルを入力し、結果を得たい。

以下に示したのは、言語と日本文化・社会・教育それぞれの卒業論文テーマのワードクラウドである。出現頻度が高い単語が、その頻度に応じて大きなサイズの字で表示されている。

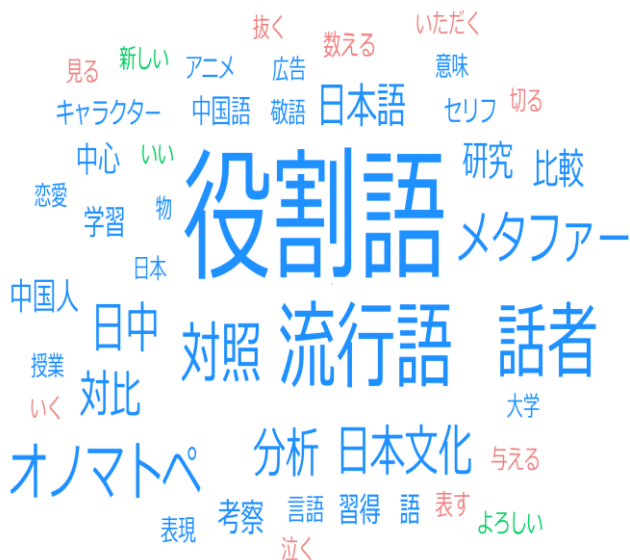


図1 言語

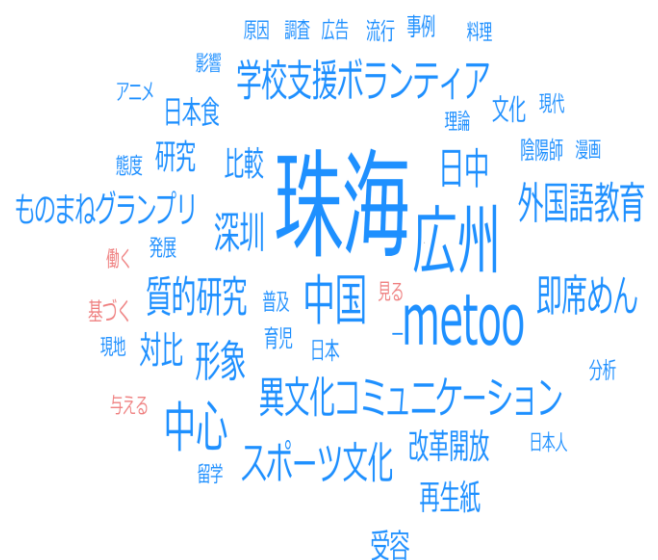


図2 日本文化・社会・教育

8. テキストマイニングツールを用いた卒業論文テーマの分析

8.1 言語をテーマとした論文

言語に関する卒業論文については「役割語」「流行語」など社会言語学の領域が多い。具体的に見てみると、

- アニメ『ゲゲゲの鬼太郎』の役割語研究——植物、自然物、器物の妖怪を中心に——（2016 年度提出）
- イントネーションから見た中国人キャラクターの役割語——日本ドラマでのセリフを例として——（2020 年度提出）

- 流行語から見る日本女性——平成以降の流行語を中心に——（2016 年度提出）

● 中国語における日本文化に由来する新語・流行語の言語的特徴（2016 年度提出）
 などである。言語テーマを選んだ卒業論文全 37 本のうち 16 本が社会言語学をテーマとしたものだった。上記 4 本の論文以外にも、図 1 のワードクラウドから「キャラクター」「敬語」など、社会言語学に関するキーワードが多くあらわれている。社会言語学の分野は役割語、広告、敬語、流行語など学生が普段様々な場面で接する言語現象を研究対象とすることができる。そのため、社会言語学の分野がテーマとして選択されることが多くなったのではないかと考えられる。

それだけではなく、上記の図 1 を見てみると「日中」「対照」「比較」などのキーワードも多いことが分かる。具体的には、

- 日中の歌詞における感情メタファー対照研究（2017 年度提出）
- 日中の食品広告における形容詞の比較研究（2017 年度提出）
- 日本語・客家語における泣く様子を表すオノマトペの比較（2017 年度提出）
- 副詞「超」についての日中対照分析（2018 年度提出）

などがあつた。日中の対照研究、比較研究は先行研究も多く、資料が探しやすい分野の一つであろう。そのうえで、学生たちは自身の母語とくらべながら研究できるテーマを選んでいる。

また、研究の資料としては上記に紹介したアニメやドラマのセリフ、歌詞や広告の他にも、料理番組の中での発話や漫才の脚本を用いたものもあつたⁱⁱ。中国ではインターネットを通じて、日本のいろいろなテレビ番組や映画を見ることができる。学生はそれぞれ、普段から親しんでいるコンテンツを資料として研究できるよう、卒業論文のテーマを設定したものと思われる。

8.2 日本文化・社会・教育をテーマとした卒業論文

いっぽうその他の日本文化・社会・教育をテーマとした卒業論文については、「珠海」「広州」といった地名が多く使用されていることがわかるが、これは「現地」「質的調

査」「事例」などのキーワードが現れていることから分かるように、フィールド調査を行った研究が多かったためである。たとえば、

- 日本食文化の中国での現地化について——広州における寿司屋と居酒屋との対比を中心に——（2015 年度提出）
- 在広州駐在員妻の異文化適応調査（2019 年度提出）
- 日本人留学生の留学動機——中国にくるケースを例とした質的調査——（2019 年度提出）

などがあつた。調査の対象という面で見ると、身近な日本人留学生の友人や日本食レストランを対象とする学生が多く、日本に行かずとも中国で調査ができるようにという工夫が見られた。このような、いわば2つの文化の接点に対する調査は、他の外国の都市でも、ある程度日本人がいるようなところでは十分可能であろう。また、全体として質的調査が多かったのは、量的調査は学生が1人で行うには難しかったという理由もある。特に、調査結果を何%というふうに出したいというような調査の場合、相当なサンプル数を集めなければならず、複雑な計算も必要となるので、学生がそのような調査計画を出してきた際は、慎重に考えるよう指導してきた。質的調査を行った卒業論文が多いのはその結果であろう。

いっぽう、実際にフィールド調査を行わなくても、さまざまなメディアを資料として調査・研究を行った卒業論文もあつた。図2のワードクラウド中に見える「広告」「ものまねグランプリ」「MeTooⁱⁱⁱ」などがそれである。実際の卒業論文のタイトルには、

- テレビ広告におけるジェンダー描写——家事・育児関連広告を例とした質的研究——

- 日本ものまね芸に関する基礎研究——日本テレビ「ものまねグランプリ」を中心に——

- 日本における#MeToo 運動の研究——#MeToo と反#MeToo についての世論を中心に——

などがあつた。いずれもテレビの広告や、日本のバラエティ番組、SNS 上の投稿などを一次資料としたものである。インターネットによってさまざまな資料が入手可能になっており、それを活用した卒業論文が多かったことが分かる。

研究の方法や一次資料の探し方については、以上のような共通点が見られた。研究分野については、サブカルチャー、食文化、メディアにかかわる卒業論文がそれぞれ 8 本ずつ、教育が 5 本、異文化コミュニケーションが 3 本、その他 8 本となっている。授業等で学んだ知識・調査方法を用いて、普段から身近に接しているものを調査の資料として行う研究が多かったようだ。

また、言語、日本文化・社会・教育という分類に関係なく、その年ごとの「流行り」、当時の最新の話題に注目してみると、

- 流行語「絆」についての考察（2014 年度提出）
 - 日中の災害報道の比較研究（2014 年度提出）
 - 日中スポーツ文化の比較——オリンピック選手育成過程の比較研究を中心に——（2014 年度提出）
 - ネットにおける流行語「イクメン」の流行とそれに対する抵抗（2016 年度提出）
- と、以上のように流行語や、オリンピックに関するものもあった。これは 2013 年の東京オリンピック開催決定のニュースに影響を受けてのものだと思われる。また、2011 年の東日本大震災のあとに流行した「絆」や「イクメン」などの流行語に関する卒業論文もあった。しかし、その年やそれ以前のニュースに直接影響を受けたと思われる卒業論文テーマは、全体を見渡してもこの程度であった。全体的にはその時々世相を反映したような卒業論文テーマはあまり見られなかったと言える。

9. おわりに

本稿では BNUZ 日本語専攻のカリキュラムや授業の内容について紹介し、そのうえで過去 7 年間に筆者が指導を担当した卒業論文のタイトルについて分析してきた。その結果、以下のことが明らかになった。

言語学の分野では、

- ① 社会言語学の領域に関する卒業論文が多い。

日本文化・社会・教育の分野では、

- ② 地元の町での質的調査や、インターネットなど各種メディアを一次資料としたものなど、資料の入手可能性や調査の実行可能性という点で、学生それぞれが自分のできる範囲での研究方法を採用して研究を行っていた。
- ③ その年ごとの最新の話題や、ニュースに関連する研究テーマは少ない。

①については、社会言語学という領域じたいが幅広い言語現象を扱う学問であること、そして、学生にとっても普段から身近に接している日本のドラマや映画、歌などのコンテンツを一次資料としたものが多いことがその原因としてあげられる。社会言語学をは

じめとした、言語学全般に関して、BNUZ の学生は日本語言語学、日本言語研究などの授業で学んでいた。いっぽう、中国では映画やドラマなど様々なコンテンツの海賊版がネット上で閲覧可能な状態になっており、そのような動画やテキストのなかの日本語を研究の資料として使うことが多い。

②と③については、いっけん別々の現象のようにも見えるが、その時々最新の話題を研究テーマとして扱おうとすると、まず先行研究が見つからない、という困難にであうことが多いだろう。資料の入手可能性、調査の実行可能性などは、いずれも研究を最後までやり遂げられるかどうかという判断をする上で重要な問題である。これらを考慮した上で②、③のような結果が出てきたものと考えれば、両者には共通の背景があると言える。

10. まとめと今後の課題

ここまで、卒業論文のテーマと授業の内容、そして、卒業論文執筆の際にもちいられた一次資料などについても言及してきた。多くの学生が、自分のできる範囲で、学生なりの発想で、今まで学んできたことを活かし、身近なテーマを学術的に分析できるようになったことは、指導者としても喜ばしいことである。しかし、当然学生全員が自分で満足できるような卒業論文を書けたというわけではない。資料が入手できない、調査が完成できない、などの理由により途中で挫折し、残された短い期間で別のテーマを書くことになったり、最終的にその年の卒論提出を見送ったりした学生もいた。本稿では、そのような卒業論文については特に扱わなかったが、それらのあまりうまくいったとはいえない卒業論文や研究計画についても今後の課題として研究し、指導に活かすべきである。

参考文献

- 大島弥生, 陳俊森, 山路奈保子, 因京子 (2016) 『中国の大学における卒業論文作成指導の過程からのアカデミック・ジャパニーズ教育への示唆』「アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル」(8) 2016-17, 28-36, アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会
- 奥平美貴, 丸野由希 (2016) 『京都女子大学現代社会学部の卒業論文題目のテキストマイニングによる分析』「2016 年度 情報処理学会関西支部 支部大会 講演論文集」情報処理学会
- 田中祐輔 (2013) 『中国の大学専攻日本語教科書の現代史:国語志向と文学思想』「言語文化教育研究」11,70-94, 早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会
- 独立行政法人 国際交流基金 (2017) 『海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より』

- 楊秀娥（2016）『日本語専攻生の卒業論文作成に対する意味付けおよびその変容プロセス—中国の大学日本語専攻における実践事例に対する分析から—』「早稲田日本語教育学」、pp.37-56, 早稲田大学日本語教育研究センター
 - 和多則明（2005）『大阪外国語大学フランス語専攻における既提出卒業論文からみた日本の教育の問題点——デカルト精神のアンカルナシオン（血肉化）教材,すなわち真の国際人育成教材としての既提出卒業論文——』 *Etudes francaises* (37) , 105-158, 大阪外国語大学フランス語研究室

 - 童心（2016）「日语专业本科毕业论文现状调查与分析——以成都理工大学日语系为例」『中国培训』2016年14期

 - 王妍（2015）「大学日语专业毕业论文在选题方面存在的问题及解决方法分析」『中小企业管理与科技』（下旬刊）2015年10期

 - ユーザーローカル テキストマイニングツール（ <http://textmining.userlocal.jp/> ）
-
- ⁱ いわゆる「キャラクター言語」「キャラ言語」のことで、卒業論文テーマは『アニメにおける幽霊キャラクター言語考』だった。
- ⁱⁱ それぞれ『料理番組におけるオノマトペについて』（2018年提出）、『いかに漫才の笑いを理解するか—関連性理論と前提理論による分析—』（2020年提出）
- ⁱⁱⁱ ワードクラウドで分析すると「metoo」と表示されるが、本来の表記は「MeToo」。